

竹内好における歴史哲学

孫 歌

一、テキストとしての「近代とは何か」(『日本とアジア』筑摩文庫 1993)

関連テキスト群の問題：「読む」という行為の「歴史性」

「魯迅」(1943)

「近代とは何か」(1948)

「近代の超克」(1959)

「方法としてのアジア」(1961)

「歴史的に読む」とはけっして「客観性」だけを強調するわけではなく、現在の立場を無媒介に歴史に押し付けることに対する警戒であり、一方、歴史的テキストに内在する理路を抉り出すことは、その構造転換の契機を発見する手続きである。

二、いくつかの概念のスケッチ

1、「抵抗」

①「掙扎 chêng-cha という中国語は、がまんする、堪える、もがくなどの意味を持っている。魯迅精神を解く手がかりとして重要だと思うので、原語のまま、しばしば引用してある。強いて日本語に訳せば今日用語法で『抵抗』というのに近い。(『魯迅』自注1)

②「そして私はその時魯迅に出会った。そして魯迅が、私が感じているような恐怖に捨身で耐えているのを見た。というよりも、魯迅の抵抗から、私は自分の気持ちを理解する手がかりを得た。抵抗とは何かと問われたら、魯迅においてあるようなもの、と答えるしかない。そしてそれは日本には、ないか、少ないものである。」(P・028)

③ただし、「抵抗」はほかの概念と重ねて理解することが必要であり、「敗北への自覚」、「ドレイ」、「自己を固執する」(この語彙は両義的であり、核心は「変化」にある)にあわせて理解しなければ、その構造的性が見えない。

2、「近代」

①、曖昧な対象としての「近代」：「概念規定から出発する方法を避けるために、近代という言葉をもつ曖昧さをここではそのままにしておく」(P・011)

②、歴史的な時間としての「近代」：「近代というのは、ひとつの歴史的な時代であるから、歴史的な意味で近代という言葉を使うのでなければ、混乱する。」(P012)

③、主体的な自己認識としての「近代」：「近代とは、ヨーロッパが封建的なものから自己を解放する過程に(生産面についていえば自由な資本主義の発生、人間についていえば独立した平等な個としての人格の成立)、その封建的なものから区別された自己を自己とし

て、歴史において眺めた自己認識であるから、そもそもヨーロッパが可能になるのがそのような歴史においてであるともいえるし、歴史そのものが可能になるのがそのようなヨーロッパにおいてであるともいえるのではないかと思う。歴史は空虚な時間の形式ではない。自己を自己たらしめる、そのためその困難と戦う、無限の瞬間がなければ、自己は失われ、歴史も失われるだろう。」(P013)

3、「西洋」と「東洋」

① 対立概念というより、互いに媒介になる概念。接点によって浸透しあう概念。「自己を失う」と同時に、「相手を変革する」。ヨーロッパは、三つの世界を生み出した。ロシアにおける反資本主義の抵抗；アメリカという鬼っ子の「超ヨーロッパ的な」世界；東洋における、ヨーロッパ的なものに媒介されながら、それを超えた非ヨーロッパ的な世界。

② 機能的なもの：「東洋の一般的性質といっても、そんなものが実体的なものとしてあるとは私は思わない。」(P029)「純粹のヨーロッパというものはないし、純粹の東洋というものもないから、それは程度の差といってもいい。」(P026-027)

三、竹内好におけるアンチ哲学の歴史哲学

1、ヘーゲルの弁証法との相関性や異質性

① 自覚によって歴史が生まれるという問題（即自と対自というカテゴリーのあり方）：「敗北が敗北感において自覚されるまでには、ある経過があった。抵抗の持続がその条件である。抵抗のないところに敗北は起こらず、抵抗はあっても、その持続しないところに、敗北感は自覚されない。敗北は一回かぎりのものである。敗北という一回かぎりの事実と自己が敗北においてあるという自覚とは、直接に結びつかない。むしろ敗北は、敗北という事実を忘れる方向に自己を導くことによって、二次的に自己にたいして、したがってまた決定的に、敗北することが多いので、その場合は当然、敗北感の自覚はおこらない。敗北感の自覚は、このような二次的の自己に対する敗北を拒否するという、二次的な抵抗を通じておこるのである。そこでは抵抗が二重的になっている。敗北に対する抵抗と、同時に、敗北を認めないこと、あるいは、敗北を忘れることに対する抵抗とである。」(P017-018)

② ヘーゲルにおける「個別経験」への軽視と正反対に、その「二次的構造」を持ちながらも、「対自」によって「即自」を否定し、さらに両者をともに止揚するというプロセスを取らず、「即自性」を失わないことによって「合理主義」に対抗する試みが見える：「私はただ、自分が経験的に知っていることをもとにして、文学的直感を手がかりとして、与えられた（つまり、現在の私自身の）問題を解こうとしているだけである」；「私にとって、すべてのものを取り出しうるという合理主義の信念がおそろしいのである。合理主義の信念というより、その信念を成り立たせている合理主義の背後にある非合理的な意志の圧力がおそろしいのである。

問題点：「ヘーゲルから受けた影響」という位相では片付けられない問題。「ヘーゲル主義」から見えない竹内好

2、運動というカテゴリーと歴史を書き換えること

①古いものが新しいものになる：「私が私であるためには、私は私以外のものにならなければならぬ時機というものは、かならずあるだろう。それは古いものが新しくなる時機でもあるし、反キリスト者がキリスト者になる時機でもあるだろう。それが個人にあらわれれば回心であり、歴史にあらわれれば革命である。」「過去を断ち切ることによって新しく生まれ出る、古いものが甦る」。(P048)

②歴史の外にある点であるものは歴史の内部に入る：「無限の一步前進のヨーロッパにおいては、歴史外の点であったものが、自己拡張によって歴史に呑込まれ、歴史内の点になってゆく。かれは歴史を変えることによって、抽象に内容を与えてゆく」。(P020)「魯迅以前には、先駆的な開拓者の型はいくつかあったが、どれも歴史から孤立していた。孤立していることで、開拓者として評価されなかった。彼らを開拓者として評価することが可能になったのが、そもそも魯迅の出現以後である。つまり、魯迅の出現が歴史の書きかえの意味をもっているので、新しい人間の誕生、それに伴う意識の全的な更新、という現象が歴史上におこり、それが自覚されるのは、いつも歴史的な一時期が過ぎ去った後からでなければならないからである」。(P11)

③必要な条件が「運動」というカテゴリー：「ヨーロッパの東洋への侵入は、一方的には起こりえない。相手を変革し、同時に自己が変革されるのが運動である。運動は幅をもっており、また幅があるから運動と知覚されるのだが、それは流れのように連続ではない。運動は抵抗に媒介される。あるいは抵抗において運動が知覚される。抵抗は運動を成り立たせ、したがって歴史を充実させる契機である」。(P027)

3、なぜ魯迅を手がかりにしたか

西洋歴史哲学において用意されていない認識論：「ドレイが、ドレイであることを拒否し、同時に解放の幻想を拒否すること、自分がドレイであるという自覚を抱いてドレイであること、それが『人生でいちばん苦痛な』夢からさめたときの状態である。行く道がないが行かなければならぬ。むしろ、行く道がないからこそ行かなければならぬという状態である。彼は自己であることを拒否し、同時に自己以外のものであることを拒否する。それが魯迅においてある、そして魯迅そのものを成立せしめる、絶望の意味である。絶望は、道のない道を行く抵抗においてあらわれ、抵抗は絶望の行動化としてあらわれる。それは状態としてみれば絶望であり、運動として見れば抵抗である。そこにはヒューマンイズムのはいりこむ余地はない」。(P041-042)

このようなテーゼの形成は、『魯迅』にも見られた。「魯迅の見たものは暗黒である。だが、彼は満腔の熱情をもって暗黒を見た。そして絶望した。絶望だけが、彼にとって真

実であった。しかし、やがて絶望も真実でなくなった。絶望も虚妄である。『絶望の虚妄なことはまさに希望と相同じい。』絶望も虚妄ならば、人は何をすればよいか。絶望に絶望した人は、文学者になるより仕方がない。何者にも頼らず、何者も自己の支えとしないことによって、すべてを我がものにしなければならぬ。」(『竹内好全集』第1巻、P113)

自己と他者を同時に拒否するということは、けっして「主体の分節化」にイコウルできないこと。それは哲学のテーゼとして、歴史に入る(あるいは歴史が湧き出る)緊張した「場」を、「空間性」を持たないものに転化させる。それは、認識論における実体性を突破することによって、主体のあり方を新たに追求する可能性を生み出す。非実体的に「自我を固執すること」を理解すること。

結び いま、なぜ新たに歴史哲学が必要なのか

- ① 常識に頼って精神生産をする現代大衆社会の知的構造
- ② その「常識」を土壌にした、日常経験と関係しない空理空論に頼るアカデミー世界
- ③ 「西洋理論」を直観的に応用するパターン、あるいはその反面、直観的に「反近代」を理解する